



# Memories



みんぐるSTREAM教室も開講。科学・技術・ロボティクス・工学・芸術・数学の6要素を網羅しつつ、子どもたちに新鮮な刺激と未来につながる気づきを与える。



みんぐるらんどでは無料工作室も開催。イベント時など多くの子どもたちが工作を楽しんだ。



みんぐるSTREAM教室には6歳の子どもから78歳の女性まで参加した。「作品づくりでお互い『負けないぞ』って、ライバル視しながらがんばっていました」と西村さん。



イベントでは小商いとして物販にも挑戦した。みんぐるSTREAM教室の受講生が作ったオリジナル缶バッジを1個500円で販売した。



おもちゃを入れたカプセルを木に吊るし、自由に取ってもらう「ときのき」でカプセルを選ぶ子ども。カプセルの中にはメッセージカードでも商品サンプルでもなんでも入れられるので、さまざまな展開が考えられる。

## Q 得られたことは?

「場」が持つ力を実感できたことです。場があり、対面で出会えると早く、深くその相手と信頼関係を築くことができます。相手が子どもだと、「こんなふうに遊ぶんだ」とか、「こんな素材をこう使うんだ」といった豊かな情報も得られます。私たちのコンセプト「みんぐる(=混ぜり合う)」にもぴったり合うことでした。

## インクルーシブな視点を取り入れ、誰でも参加できるアート教室も

ユニット名のみんぐるりんごは「みんぐる (mingle) = 混ぜり合う」と「りんご (lingo) = 言葉」を合わせた造語。そして富士見BASEで始めた混ぜり合う場が「みんぐるらんど」です。子どもたちにアートのワクワク感を感じてもらいたい、まずは無料工作室の開催から始まり、継続的な教育の場として「みんぐるSTREAM」教室もスタートしました。絵画にプログラミング要素も取り入れた教室です。「富士見BASEでの出会いから、外で行われるイベントを紹介してもらっ

て出展し、そこで私たちを見た企業からワークショップの仕事をお願いいただくこともありました。富士見BASE内で収益を出すことは難しかったですが、ここでの活動が外へ広がりました」と西村達也さんは話します。また教室を開催するなかで、特別支援学級に通う子どもが参加できるワークショップが少ないことも知りました。「これからはインクルーシブな視点を取り入れ、誰でも参加できるアート教室を広めていきたいです」と愛子さん。二人の挑戦はこれからです。

## 富士見BASE 事業者紹介

# みんぐるらんど

運営したのは?

アートユニットみんぐるりんご (minglelingo) の西村達也さん・愛子さん。それぞれエンジニア、大学准教授として仕事をもちながら、富士見BASEに参加。

子どもたちの創造力を引き出します





# Memories



黒板には集まったプラスチックの量を記入した。ペットボトルのキャップや化粧品ボトルなど、回収しているプラ製品の例をわかりやすくチラシやポスターにして掲示した。



6畳の部屋に作ったファブスペース。ここで何をしているのか、ひと目でわかってもらえるように「あつめる」「くたく」「かためる」と記したのれんをつくった。



まちなかなんでもマルシェの「リマインダークリップ」づくりの一場面。自分の好きな色の再生プラスチックを選んで切り、「世界に一つ」のものをつくった。



まちなかなんでもマルシェではカラフルな再生プラスチックを切り貼りして「リマインダークリップ」をつくってもらうワークショップを行った。参加者が出来上がりを見せてくれた。



ファブスペースにはプラスチックシュレッダーやヒートプレス機、電動糸ノコギリなども揃えていった。子どもも来るころなので安全面には特に配慮した。

## Q 得られたことは？

富士見BASEの活動を通して、市内の別の場所で行われるイベントに呼んでいただいたりして、そこでまた新たな出会いがあり、仲間も見つかりました。6畳の部屋で、プラスチックが再生される一連の過程を透明性をもって見せられたことも、私にとって自信にもつながり、いい経験になりました。

「ゴミ」の概念を逆手にとったら、ものづくりがそれまで以上に楽しくなりました

まちの人たちからプラスチックゴミを回収し、砕いて資源にして、オリジナルグッズなどにしていく「再生プラスチックステーション pebbles (ペブルス)」をオープンさせた太田風美さん。太田さんの活動のベースには「エコ不安症」があるといいます。日本を含め、世界各地で頻発する異常気象や山火事、大気汚染などのニュースに触れ、地球の未来に対し不安や無力感、罪悪感などを抱いてしまう症状です。太田さんはものづくりも好きだったので「試作品で『ゴミ』をつくるくらい

なら、最初からつくらないほうがまだ」とまで考えるようになりました。pebblesはその「ゴミ」の概念を逆手にとる取り組みです。ゴミとして廃棄される運命となったプラスチックを再生し、オリジナルグッズをつくっていく。そう考えると、「ものづくりがそれまで以上に楽しくなった」そうです。ただ独立した事業として始めるのは現実的ではなく、そんなときに富士見BASEと出会いました。「ここでスタートを切ったことは本当にありがたい」と話しています。

## 富士見BASE 事業者紹介

### pebbles (ペブルス)

運営したのは？

太田風美さん。普段はVR・ARなどを開発するIT企業でフルリモート勤務している。調布市飛田給育ち。



“ゴミ”を  
アップサイクル  
します!





# Memories



まちなかなんでもマルシェでは、ギターの弾き語りでも来場者を楽しませた。「初めてやったのですが、みんな聴いてくれてうれしかったです」。



オープン初日、本が置かれているOur Living Room Cafeではこんな交流の場面も。ご近所の方と若者との間で自然な会話が始まった。

## Q 得られたことは?

ここでは運営者側として人のために居場所をつくらせている感じになっていますが、実は自分のための居場所でもあったんだと思います。僕よりずっと小さな子どもから、母親と同じ世代、おばあさん世代までいろんな人と話せたことも楽しかったです。コミュニケーション能力が高まりました!

き家を使った無料のカフェを開きたいと動いていたこともあり、富士見BASEでの活動が決まりました。「やはり『自宅』では遠慮をして入ってきてくれない人も多かったのですが、富士見BASEのようなオープンスペースだと入ってきやすいので、いろいろな年代の方に来ていただけるようになりました。人と会話ができるころはやっぱりいいところです。図書スペースに本を持ってきてくださる方もたくさんいました。本を片手に年代が違いう人同士の会話が始まったりして、うれしかったです」と振り返っています。



Our Living Room Cafeは富士見BASE1階の中央スペースで運営した。コーヒーなどが用意されていて、自由に飲むことができる。人が集まれば自然と談笑スペースに。



こちらはまちなかなんでもマルシェでの紙芝居。子どもたちを楽しませようと、「はだかの王さま」の紙芝居を使って読み聞かせをした。

「寂しさ」をなくしていききたい。無料カフェで生まれる会話を楽しもう!

コロナ禍で人と直接会うことが減り、他愛のない会話もしにくくなったとき、コーヒーやお茶でも飲みながら話をしませんか? と自宅を開放し、無料のカフェ「Our Living Room Cafe」を開いたのが熊谷大輔さんです。「多くの社会問題は数値で表せませんが、人が感じる『寂しさ』は数値化できません。その『寂しさ』をなくしていきたくて活動を始めました」と話します。富士見BASEが始まる以前から、空

## 富士見BASE 事業者紹介

### Our Living Room Cafe

#### 運営したのは?

熊谷大輔さん。中学3年生。もともと自宅を開放し、無料カフェを開いていた。富士見BASEでも無料カフェ&図書スペースを運営。

